トップランナーに聞く

ドイツ・バウビオロギー運動の創始者

ホルガー・ケーニッヒ氏インタビュー①

「日本型パッシブハウスの開発はまったく新しい挑戦」

世界で環境意識が高まるなか、早くから環境問題の社会的な実践が進むドイツ。建築の分野でも早くから「建築生態学（Bau Biologie）」が発展してきた。人体の健康を害さない、環境の負荷をかけないという条件を満たしながら、より快適に住まえる手法が考えられてきた。先日来日した、バウビオロギーの分野に30年前から取り組む建築家のホルガー・ケーニッヒ氏に、バウビオロギーの視点からみた現状と日本の住宅の評価を聞いた。

1951年ミュンヘン生まれ。ミュンヘン工科大学、同大学院で建築を学ぶ。83年にエコロジー建材店および家具工房の経営の傍ら、設計事務所を主宰。96年よりエコプラス社を設立し、建材の認定およびコンサルタントに携わる。著書に「健康な住まいへの道・バウビオロギーとバウエコロジー」建築資料研究社がある。（プロフィールは上書より参照）

Q：ケーニッヒさんは、すでに日本には幾度か訪れたことがあるそうですが、改めて日本の町並みや住宅の印象はどうですか？

A：伝統的な日本の住宅にはつねにエコロジカルでサスティナブルだった。これまで数回日本を訪れ、短いあいだが移動中の車窓から街を眺めたり、国内の住宅や建築現場を視察した範囲では、現代の住宅は2×4工法のようなパネル型の工法、プラスチック系の断熱材とプラスチックシートをかぶせた仕様が増えたように感じます。

また躯体と内装は出来合いで、外観はカタログから施主の好みに合わせて「インペリアル（英国風）」「モダン」「トラディショナル」までなんでもあれ。まるでディズニーランドの舞台セットのようです。その場の目新しさだけを追求したこのような住宅はまったくバウビオロギーとはいえない。こうした現代の住宅の変化にはショックを受けました。

また街を歩くと、アメリカ資本の店舗があちこちにみられ、そのなかに神社やお寺が点々と残っている。二つの文化が完璧に分断されて混在している様もショックでした。寺や神社に対しては保存するが、住宅に関してはそういう雰囲気は感じられない。古いものを評価する価値感が住宅に限ってはどこかへ消えてしまっている。日本の住宅がどのように伝統を忘れたのか不思議に思いました。

一方で今回は、住み手の体本位の素材選択や快適性を追求した建築デザインを備えた住宅に出会いました。そのままドイツに持ってきてもよいほどで、日本の住み手にも意識の変化を感じました。日本の住宅の供給者はこうした新しい市場の台頭にしっかり目を向ける必要があります。

Q：南面ガラス窓、断熱性・気密性の高い建物外皮、熱交換換気設備を組み合わせて実現する「パッシブハウス」が普及しているようですが、こうした住宅は、日本やタイのような温帯や亜熱帯の気候のアジアでも有効でしょうか？

A：パッシブハウスには建物の暖房エネルギー消費が15kWh／時以下という性能値の定義があり、この目標値はどの気候でも同じです。

日本やさらに南方の亜熱帯地域では、われわれの住むヨーロッパのように暖房エネルギーがかからない代わりに、夏の冷房へのエネルギー需要は高くなる。この点人工的また自然の通風・換気機能が必要になります。亜熱帯地域に適応する住宅をつくるには、われわれヨーロッパで実現した北方型の「パッシブハウス」から相当根本的な変化を加える必要があります。冷房とこれはまったく新しい挑戦になるでしょう。

ドイツのフラウンホーファー建築物理学研究所では、地球上のさまざまな気候に適したパッシブハウスの開発を行っています。

Q：バウビオロギーの普及について、現段階でどこまで達成されたとみているか、新たにどんな課題があると考えているか？

A：バウビオロギーは、有害物質の建材市場からの排除をこの30年間要求してきた。しかしその間に起きた変化はほんの少しに過ぎません。エコマテリアルを選ぶ市場はドイツでも5%でしかないのが現状です。

健康な住宅に住みたいかと聞かれれば誰でもはいと答える。しかし、自分が使っている身の回りのものがどれだけ有害であるかを意識する人は、全体の5%に過ぎないということです。

有機化学物質を使わない姿勢は最近になってようやく認知されてきました。うれしい傾向です。

一方で、遺伝子組み換え材料やナノテクノロジー素材を含む建材は表示が必要です。今後2年から3年でこうした物質の安全性は大きな議論になっていくでしょう。

Q：バウビオロギーの考え方のうち、建築によって住み手の体への快適さを追求するという側面について教えてください。

A：住み手の快適性を考えるときに常に心に留めておくべきことは「感覚は働きたがっている」ということです。

人間が一日中まったく同じ温度で音がまったく無い部屋に閉じ込められたら、おかしくなってしまうでしょう。

木製テーブルの木目を見るといろいろな色が見えている。これが目に心地よい感覚を与える。これがアルミ製の表面だと、木目のような刺激を得られない。これが逆にストレスになることがあるのです。

建物内の温度も全部を均一の温度にすることは体にとって逆にストレスになります。リビングは少し暖かめに、寝る場所はすこし温度を下げておくべきでしょう。

足や手の触感を刺激するためには均一の素材を使うのではなく、いくつもの素材を組み合わせるのがよい。日本のタタミは感覚を刺激するのに最適な床材です。

建築をデザインするなら、人間の目や鼻や耳や感覚がどのように機能しているかを知ることからはじめなければいけません。残念ながら現代の建築家の方は人間の感覚がどんなときに機能しているかを理解して建築している人がほとんどいない。これでいて建築が住み手に快適さが生まれるとしたら、それは偶然でしかありません。

（談・文責編集部）